



夫婦自転車操業——発見に満ちた子育て

産業技術総合研究所ヒューマンライフテクノロジー研究部門 主任研究員

永井聖剛 (ながい まさよし)

関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(心理学)。専門は視覚認知、身体と認知。著書は『心理学研究法1: 感覚・知覚』(分担執筆, 誠信書房)など。

日産自動車(株)総合研究所 研究員

西崎友規子 (にしざき ゆきこ)

大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程修了。博士(学術)。専門は認知心理学、認知工学。著書は『脳とワーキングメモリ』(分担執筆, 京都大学学術出版会)など。

6月につくばで開催された日本認知心理学会に、4歳の娘を連れて初めて親子3人で参加しました。専門領域が近い私たちにとって、年に数回の夫婦揃って参加する学会時の娘のケアには頭を悩ませます。これまで、首都圏開催時は日程をにらめっこし(夜の宴会も日替わりで)、地方開催の場合は現地の一時保育に預けるなどしてきました。今回はやむを得ず夫婦どちらかが学会中に娘に付き添いましたが、娘は多くの先生に優しく声をかけていただき(控室でお菓子をいただいたり)、「パパママのお仕事ってこんなもの?」となんとなくわかったようで、良い経験をさせてもらえました。

私たち夫婦は出身大学こそ違えど、博士課程に入ってすぐに知り合い、共に博士号を取得した後に結婚しました。共通の趣味は残念ながら「研究」ではありませんが、互いの仕事に対する思いは言葉にしなくても通じるものがあり、子どもについても「まだ先のこと」という思いを抱えていました。結婚直後に2人でカナダに渡り、帰国後、夫は定職を得たものの妻はキャリアアップのために研究と学業に勤しみ、妻が定職を得れば共に長距離通勤となり、とにかく自分たちの生活に精一杯な毎日を送っていたということもあります。ただ、カナダでの夫のボス、バット・ベネット&アリソン・セクター夫婦(2人の男の子の父母)の「子どもを授かり育てるのにベストタイミングはない」とい

う言葉は、決して子ども嫌いではなかった私たちの心に引っ掛かり、結婚6年目に娘が誕生してきたのでした。

これまで、夫婦は互いを尊重し、適度に我が道を進んできましたが、娘の誕生後は「チーム」として行動せざるを得なくなり、チームメイトの新たな人となりを見出すことになりました。

父親の私(永井)は、離乳後は母乳を持たない男性のハンデに悩まなくてもよいと安堵していましたが、現実には全く異なりました。妻は出産するや否や本能的に母親の役割を立派に果たしており、驚くと同時にその順応力に頭が上がりません。対して、私は理性的に徐々に父親として成長している気がします。家事育児は半分ずつを目指し(実際のところは夫:妻=3:7くらいでしょうか)、妻の出張不在時や、父娘2人での泊まり出張など娘とは多くの時間を共有していますが、どうしても母親でしかダメという場面があります。

母親の私(西崎)は、夫が娘の視点にたつことを怠りがちで、大人のエゴではないかと感じるものが多々あります。例えば、交通量の多い交差点を急いで渡る時、夫は「ここは危ないから」と4歳にもなった娘を何も考えず抱っこし、走って渡ってしまうのです。一方で、おしゃべりが達者な娘の物言いに本気でイラッとしてしまうことがある私

に対して、夫はそれをユーモラスに受け止めているのを見ると、タイプの違う父母がいることの大切さを感じます。

夫婦ともに長距離通勤、保育園への送迎や行事への参加、娘の就寝後に深夜までやり残した仕事をし、休日は朝から子ども番組に付き合わされる、と父母の寿命を縮めながら日々を生きている感があります。生後3カ月から保育園に預けて妻は復職し、乳児期の写真整理すら終わらないまま、自転車操業のごとく、家族3人が走り続けています。しかし、娘が家族に加わらなければ想像すらできなかった世界は素晴らしく、無垢な子どもの視点ならではの発見の数々、娘を通して広がっている交友関係、自分たちの子ども時代を再体験する喜び……と挙げればきりがありませんし、研究で新たな着想を得ることも少なくありません。これからも、娘の成長に伴ってダイナミックに変化する生活を楽しみ、家族3人が支え合うと同時に、それぞれ我が道を進みながら成長していきたいと思えます。



乳児のとき被験者として視覚認知実験に参加